

遠い空の下の故郷^{ふるさと} 朗読 1 ～阿部智子さんのお話～

— 導入の音楽のうちに朗読者登場

心のふるさと

わたしは小さいときから川辺で遊ぶのが好きでした。子どもごろころに、水がぬるんでくると春が近いなと感じたものです。冬を越して春になると、木の枝が薄赤く芽吹いてきます。枝の先にきらっと光る新芽が出てきます。その新芽が日の光に映えて、とってもきれいな。

春になると河原にオキナ草が咲きます。濃い赤のピロードのような花です。それが気になっていつも見に行っていました。それから、もうネコヤナギが咲いたかなとか、風の感じや水がきらきら光るのを見て、もう秋が近いなとか思ったり。

発病

小学校六年生の一学期でした。体に湿疹が出たので病院で診て貰いました。診察が終わって帰ろうとしたとき、お医者さんが「ちょっと」とお母さんと呼び止めて、なにやら話していました。「早く療養所に連れて行かないと、保健所から連れに来るぞ」と言う声が聞こえました。

「療養所って、わたし何の病気なの？」

お母さんは厳しい声で「なんでもない」と言いました。

そのころ、わたしは学校から帰ると、まだよちよち歩きの兄の子どもの子守をしていたんですが、兄嫁はすぐ子どもを連れて実家に帰ってしまいました。

母は毎日毎日、心配そうにわたしの顔をみるばかりで、本当のことを言ってくれません。けれど、まわりはみんなわかっていたんですね、それ以来、幼なじみの友達も遊びに来なくなりました。そしてとうとう兄も別居することになり、わたしは自宅療養をつづけることになりました。けれど、もう大好きな川辺に出かけることはできなくなりました。

家から出ることもできず、一日中することがありません。まだテレビのない時代でしたから、一人で家の掃除をしたり、台所の汚れ物を磨いてみたりしていました。そんな生活が三年以上つづきました。もちろん誰もたずねては来ません。学校の先生が一回訪ねてきたのは卒業証書を持ってきたときです。

もうそのころはわたしは自分の病気がハンセン病という病気らしいことはわかっていました。お母さんはあらゆる薬を手当たり次第集めました。いかがわしい薬でも、それがわたしの病気に効くと聞けば、とにかく手に入れてきて、わたしに飲ませるのでした。またある年は、皮膚病に効くと言われる田舎の温泉に湯治にやってくれました。

人里から遠く離れた山あいにある静かなところでした。まわりに話し相手がいませんでしたから、いつもひとりで草や木に話しかけるのです。ちょうど野菊が咲いてるころでした。みんなで肩を寄せ合って咲いてる野菊はとっても幸せそうでした。

遠い山から吹いてくる
こ寒い風にゆれながら
気高く清くにおう花
きれいな野菊うすむらさきよ

霜が降りても負けないで
野原や山に群れて咲き
秋のなごりを惜しむ花
明るい野菊うすむらさきよ

わたしは本を読むことが好きでした。お母さんは学校に行っていないので本を読むことができません。お母さんは十三歳で他人の家に働きに行き、ずいぶん苦勞して育った人でした。

雨が降るとお母さんは縫い物をします。そのそばで本を読んでいると、「声を出して読まんね」と言います。お母さんが一番喜んで聞いてくれたのはイギリスの子どもの小説「小公女」でした。

小公女の主人公セーラは、何不自由ない生活から、両親を失って、突然屋根裏部屋の貧しい生活に追い込まれます。けれどセーラは貧しさやつらさにめげず、カチカチのパンをかじりながらネズミと友だちになり、心豊かな生活をつくりだす少女です。

「兄ちゃんが読んでくれてもよくわからんが、お前が読むとよおくわかる」

お母さんはそう言ってわたしをほめてくれました。わたしの将来を案じて、つらい運命にめげないで生きて欲しいと思ったのでしょう。

決心

梅が咲き始めたころのある晩のことでした。親戚のおじさんが訪ねてきて、「やっぱり療養所に行った方がいいんじゃないかな。もし、お兄ちゃんが帰ってきても、あんたが病気だとつらい思いをするからなあ」と言いました。

わたしは八人兄弟の末っ子で、一番上の兄さんは戦争に行ったまま帰ってきませんでした。もう戦争が終わって十年もたっているのに、それでもお母さんは兄ちゃんはきっと帰ってくると言い続けていたからです。

わたしも兄さんを悲しませたくないと思いました。わたしのために両親や家族が苦しんでいることを思うと、わたしがいない方がいいこともわかっていました。けれど、どこにも行きようがありません。わたしはそっと外に出ました。冷たい晩でした。庭の大きな白梅の木の下で泣きました。

自分は死ぬしかないと思いました。けれど、ただ死ねばいいのではありません。死んでも見つかったら家族が困るのです。わたしのなにもかも、全部が消えてしまわなければならないのです。

空を見上げると無数の星が輝いています。小学校のとき習った歌が聞こえるような気が

しました。自分も死んだらあの星の一つになるのだろうかと思いました。

木枯らしとだえて 冴ゆる空より
地上に降りしく くすしき光よ
ものみな憩える しじまのなかに
きらめきゆれつつ星座はめぐる

ほのぼの明かりて 流るる銀河
オリオン舞い立ち スバルはさざめく
無窮を指さす 北斗の針と
きらめきゆれつつ 星座はめぐる

星空を見つめながら、わたしはお母さんのためにも療養所に行こうと決心しました。そして、もう二度と帰っては来られないのだから、故郷の姿を自分の心の中にしっかり焼き付けておこうと思いました。あそこに何があって、どこにどんな花が咲いているか、どんな実がなるかは今でも全部覚えています。

わたしが入所することを心に決めてから、お母さんは仕事の合間に、あれやこれやと持って行くものなどを準備してくれていました。その日は糸のカセをわたしに持たせて、お母さんが巻き取りながら、何気ない話をしていたとき、突然お母さんの顔が真っ赤にふくらんだように見えました。そして次の瞬間、身体の底から振り絞るような「アーッ！」という叫び声とも泣き声ともつかない声をあげました。それはお母さんが、それまで耐えて耐えて、押しつぶしてきた悲しみのかたまりが、一気に吹き出した声だったのです。わたしはどうすることもできませんでした。

療養所

出発の日が来て、兄が町からハイヤーをやとってきました。運転手が二人ついていました。昼間だと近所にわかるからと、夜十一時に家を出ました。もう帰ってはこれないのだと、車の窓から家の灯が見えなくなるまで見ていました。わたしはもう十六歳になっていました。

わたしが入ったのは熊本の菊池恵楓園という療養所です。療養所に着くと一休みして、七時半に食事が出されました。見ると兄がいません。お母さんに聞くと、もう帰ったと言います。「何か言って行った？」とたずねましたが、お母さんは黙って首を振るだけでした。

療養所へ来たのは四月の中旬でした。(音楽終わり、一呼吸)

キンセンカの花盛りでした。園内にはお花畑がたくさんありました。人はにぎやかに行き来しています。まだ子どもでしたから、明るくていいとこだなと思いました。でも、不思議だったのは療養所だというのに、みんなが一生懸命汗を流して働いていることでした。

療養所なのになぜみんな一生懸命働いているのだろうかと思いました。見ていると、職員に怒鳴られながら働かねばならなかったり、一日中見張られたり、ずいぶん不合理なこ

とばかりです。

患者が亡くなると遺体は荷車に積まれて火葬場へ運ばれていきます。これも患者の仕事です。町の火葬場は使わせて貰えないので、療養所の中に専用の火葬場がありました。

最初に診察を受けたとき、お医者さんは「二～三年したら治って帰れるよ」と言いました。けれど、病気が治っても家に帰れないことはすぐわかりました。病気が治っても、あの火葬場で焼かれるまで、ここで働きつづけなければならないのです。

裏切られた思い

お母さんは一年に一回か二年に一回、お金ができると隠れるようにして会いに来てくれました。田舎では外出する格好をすると「どこへ行くの」と聞かれるからです。たいていは姉たちのところへ行くと言って家を出たようです。

お母さんは「小公女」の話をよく覚えていて、「セーラのように、いくら悪い環境にいてもそれを楽しい場所に変えていかんとな一え」と言っていました。

面会者が出入りする小さな通用門の先に巡視小屋があって、面会者はそこで木札を貰ってから入ります。帰りにはまたその巡視小屋で木札を返すのです。

巡視というのは患者が逃げ出さないように見張る職員のことです。四人か五人いました。療養所は刑務所のように高さ二メートル以上もあるコンクリートの塀で囲まれていました。その外側には深い堀があって、塀を乗り越えても逃げられないようになっています。その堀が浅くなると、すぐまた深く掘っていました。それでも安心できないらしく、監視する職員が園内を歩きまわっているのです。

そのときは人通りもなく、門の所にも誰もいなかったので、何気なくお母さんを送ろうとして一緒に外へ出ました。巡視小屋の近くまで来たとき、一人の巡視がわたしに「ちょっと」と声をかけました。見ると、入所したとき、親切に荷物を運んでくれた巡視さんでした。あの時の優しそうな人だと思ったときでした。

「患者はあそこから出てはいけない。すぐ帰んなさい！」

まるで人が変わったような厳しい声です。優しい人だと思っていただけに、少女のわたしにはショックでした。ああ、ここは本当に収容所だった。もうここに入ったらおしまいなのだと思います。

左手の傷

ハンセン病のつらいところは、病気が治っても後遺症として手足に感覚の麻痺が残ることです。指先や足先の感覚が麻痺すると、実は生活面でいろいろ不自由なことがあります。痛みを感じないので、わたしたちはよく怪我をします。怖いのはハンセン病より怪我をすることです。療養所内の病院では、ハンセン病の治療より外科の治療の方が多いのです。

わたしの左手首には今でも大きな傷あとがあります。すぐ皮膚が割れて傷になります。これも、感覚の麻痺が原因でなったものです。

まだ、療養所に来る前のことですが、ちょっとしたしこりがあったので、家にあった油薬を塗って、よく身体にしみこむようにと火鉢にかざしていたんです。ところが、熱さが

わからないものですから、気がつくまで水ぶくれができていました。子どもなものですから、あわてて今度はお風呂に使っていた硫黄成分の薬湯をつけたのです。その薬湯は昔から皮膚病に効くと言われてうちでも使っていたものですが、薬湯に含まれる硫黄のために、かえってただれがひどくなってしまいました。

わたしはお母さんに叱られると思って、見つからないように、包帯を巻いて隠していました。けれどすぐ見つかってしまいました。皮膚は黒こげ状態でした。このままにしていたら手が腐ってしまうと、お母さんはあわてました。しかし、悲しいことに、病気を隠しているものですからお医者に行くことができません。結局、お母さんはかみそりでわたしの腕の黒く焼けた皮膚を削ることにしました。わたし自身は痛みを感じないので、目をつぶっていましたが、今思うと、お母さんはどんな気持ちでわたしの皮膚を削ったのだろうかと心が痛みます。

お母さんの死

わたしがここへ来たのは四月二十五日でしたから、毎年春が来て、キンセンカの花を見るたびに、「ああ、もうあれから何年になるなあ」と勘定します。そして、別れた日のお母さんのやつれた顔を思い出すのです。

あれからちょうど三十六年目の日を迎えたときのことでした。その晩、お母さんの夢を見たのです。お母さんが死んでしまって、わたしはお母さんの身体を抱いて、なんとか生き返らせなくてはと、一生懸命「お母さん！お母さん！」と呼んでいるのです。そのうちはっと目が覚めました。

それから三ヶ月たったころ、郷里の親戚の人から電話がありました。

「あんたには知らせたくなかったんだが、ばあちゃんは死んだよ」

「いつ？」

「もう三ヶ月になるか……」

それはちょうどわたしがお母さんの夢を見た日でした。本当に不思議なことですけど、やっぱり、お母さんはわたしのことが気になって、お別れに来たのだなと思いました。

何もかもが壊れてしまい、自分の身体が真っ暗闇のなかに吸い込まれていくような気がしました。わたしのためにつらい一生を送ってきたお母さんなのに、せめて息を引き取る時だけでもそばにいてあげたかった。わたしはお母さんが可哀そうで可哀そうで、何日も何日も泣きました。

やっと思ひ直して、ながいこと世の中の差別に耐えながら、わたしのことを思いつづけてくれたお母さんに「お母さん、ありがとう。楽になってよかったね」と言ってあげたいと思いました。

「お母さん、楽になってよかったね。身軽になって、明るいところへ行っただね」

ふるさとの山に

わたしは長い間、世の中に戻って暮らすなどということは考えたことはありませんでした。それはもうあまりに遠い世界になってしまって、望んでも叶わないことだと思ってい

たからです。それに、わたしにはもうお父さんもお母さんもいませんから、ふるさとは帰れません。

自分が死んだあとのことを考えるとき、夢のような願いですが、自分の骨を、ふるさとの見える山に散骨して貰いたいと思っていました。そうすれば雨が降って、わたしは水に溶けて川へ流れていきます。川へ出たらわたしの家の近くを通れるのです。

子どもの頃、花を摘んだ川辺、ネコヤナギのあるあの川辺を流れていくのです。遠くからひと目、お母さんといっしょに暮らしたわが家が見えるはずです。あの懐かしい白梅の大木は今でも残っているのでしょうか。

それから、わたしはきっと広々とした海に出るでしょう。海へ出たら世界中を巡り歩きたい。わたしは子どものときに療養所に入りましたから、どこにも行ったことがありません。海に出たら、わたしの心はきっと軽くなるにちがいません。そうしたら、魚と同じように自由に泳いで、好きなとこにどこでも行けるなあと思いました。

— 音楽の中で一礼して退場